1 レポートを書くために　－人文科学・社会科学分野から－

みなさんはどのような状況で、今、このガイドブックを手にされているのでしょうか？

とくに、琉球大学へ入学されて間もないみなさんには、大学での講義や演習に対する期待とともに、大学での学び方に対する不安もあることでしょう。これまでみなさんが受けてきたであろう小・中・高等学校における各教科の授業では、主に教科書に基づきながら〈ある問い〉に対して‘ひとつ’の〈答え〉を導き出したり、〈知識〉として覚えたりする勉強としての学びを求められることが多かったのではないでしょうか。もちろん大学においても、そのような学びが無いわけではありませんが、むしろ〈ある問い〉に対して‘複数’の〈考え〉、あるいは新しい〈知見〉を導き出すことをめざしていくような学習としての学びを求められることとなるでしょう。そのような学びの中にあって、大学の多くの講義・演習の中には、覚えるべき知識・技能を単に問うのみではなく、講義・演習を通してみなさん自身の考えを「レポート」という形式で表現することが求められることも多々あります。とはいえ、自身の考えを思いつくまま表現したからといって、それがはたして「レポート」になるのでしょうか。少なくとも単なる作文とは性質の異なるものが「レポート」であるということは感じられていることでしょう。ぜひ早い機会に本ガイドブックを一読され、まずは琉球大学での学びを深めるための手がかりとして、レポートを書こうとする際に、有効に活用してもらいたいと願っています。

本章では、そもそも「レポートとは何か」という基本的概念を確認した上で、みなさんがこれからレポートを執筆するにあたって最低限知っておいて欲しい事柄について、具体例を挙げながら確認することとします。なお、ここで取り上げるレポート執筆の考え方については、主として人文科学・社会科学分野を広く想定したものであり、個別具体的に課されるレポートの中には、求められる要件が異なる場合もあります。本ガイドブックを手がかりとしながらも、実際のレポート執筆に際しては、各講義・演習において課されるレポートについて、担当教員が何を求めているのか確認することも忘れてはなりません。

1.1. レポートとは何か

私たちが様々な考えをもった人々と生活を共にしていくためには、そこで生活する人々同士が守るべき最低限のルールやマナーをわきまえておかなければなりません。仮に、そのようなルールやマナーを無視した生活を送ろうものならば、円滑な人間関係のもとで生活を送ることは困難となるでしょう。同じように、レポートを書くに当たっても、最低限のルールやマナーをわきまえておかなければ、レポートを書く側と読む側とで不都合が生じてしまいます。

ここでは、まず「レポート」と「論文」という用語について、いくつかの辞典や文献を

ひもときながら、両者の違いを明らかにし、これから取り上げる「レポート」とはどのようなものを指しているのか明らかにすることからはじめてみることとします。

【表 1-1】は、「レポート」と「論文」の違いについて、『広辞苑』や『大辞林』、及び、レポートや論文の書き方について論じたいくつかの文献において述べられている説明をまとめたものです。

【表 1-1】「レポート」と「論文」の違い

	レポート	論文
新村出編『広辞苑第六版』岩波書店，2008 年.	（リポートとも）①報告。報道。②報告書。学術研究報告書。	①論議する文。理義を論じきわめる文。論策を記した文。②研究の業績や結果を書き記した文。
松村明編『大辞林第二版』三省堂，1999 年.	(1) 研究・調査の報告書。学術研究報告書。(2) 新聞・雑誌・放送などで、現地からの状況などを報告すること。また、その報告。レポ。	(1) ある事物について理論的な筋道を立てて説かれた文章。(2) 学術的な研究成果を理論的に述べた文章。
斉藤孝，西岡達裕『学術論文の技法 新訂版』日本エディタースクール出版部，2005 年.	レポートとは、いわば家で書いてくる答案で、学校の試験場で書くよりは分量が大きく、いろいろな参考書を読んで書くことができます。…〈中略〉…要するに、自分が勉強したことを、教師に見せる手紙と考えてよいでしょう。	学術論文とは、自分の研究の結果を論理的な形で表現するものであります。…〈中略〉…文章を飾ることや自分の感情を吐露することが学術論文の任務ではありません。
八杉龍一『論文・レポートの書き方』明治書院，1971 年.	レポートはだいたいにおいて論文の習作であり、試論であるということができるでしょう。その習作は、いろいろの形でありえます。論文のひな形である場合、それの部分的な骨格を示す場合、論文とは多少ちがった形で何らかの主張をのべる場合などです。	論文は、それぞれの学問分野で専門の研究者によって書かれるもので、その著者が自分の研究でえた結果を報告し自分の意見をのべたものであり、それによってその学問分野に新知見をもたらすものである。

【表 1-1】からは、「レポート」と「論文」の違いについて次のように捉えることができます。

「レポート」とは、何かしらのテーマについて調べるよう求められたことについて、調査を行い、その調査結果を明確に示す（報告する）ことが求められるものと考えられます。

「論文」とは、レポートと共通して何かしらのテーマについて調査・研究を要するものの、得られた調査・研究結果について、自身の見解を含めて論じることが求められるものと考えられます。

このように、狭義においては、「レポート」が調査結果の事実のみを記すものに対して、「論文」は調査結果のみならず、その結果を分析・考察し自らの考え（知見）を含めて論じる特質のあるものであると考えることができます。しかしながら、「レポート」と「論文」の解釈については、必ずしも明確に区別されているとは限らず、たとえ「レポート」であっても提示されたテーマについて調査した結果を踏まえつつ、自らの考えを含めて「レポート」することが求められる場合もあるでしょう。単なる報告書としての位置づけの「レポート」なのか、自らの考えも含めた「論文」としての要素も求められているのか、事前に確認しておくことが大切です。

1.2. レポートのテーマについて

レポートを書くということは、料理をつくることに例えられることがあります。

まず、どのような料理を作りたい（作って欲しい）のか、明確にしておかなければなりません。たとえば、和食か？中華か？洋食か？など、自分（あるいは他人）が何を食べたいと思っているのか、大まかなジャンルから選択肢を狭めていくことでしょう。もし、和食に決まったとしても、天ぷらを作るのか？煮物を作るのか？と、より具体的なメニューを絞り込んでいく必要があります。さらに、メニューが決定したとしても、おいしい料理を作るためには、よりよい材料を選び（あるいは探しだし）、適切な材料の下ごしらえをし、煮る・焼く・蒸すといった調理方法に応じた火加減、味付けのさじ加減などが求められます。

そのような料理を作るプロセスは、レポートを書き上げるプロセスと大変よく似ているところがあります。レポートを書くためには、テーマを明確にしておく必要があります。テーマが明確であっても、よりよいレポートを書こうと思うならば、テーマに見合った適切な資料や情報を探しだし、それら資料や情報に示された内容を読み解き、文章としてまとめるのか、図表に置き換える必要があるのかなど検討をしながらまとめていくことが求められます。

いずれにせよ、何が食べたくて料理を作るのかという考え方と同じように、どのようなレポートを書きたいのか、何のためにレポートを書かねばならないのか、というレポートのテーマが決まっているのか否かが問題となります。

次項では、「テーマ自己決定型レポートの場合」と「テーマ既定型レポートの場合」とに分けて述べていくこととします。それでは、レポート執筆の第一歩を踏み出していくことにしましょう。

1.2.1. テーマ自己決定型レポートの場合

ここでは、自分の興味・関心に基づいてレポートのテーマを設定し、執筆しなければならないような場合のレポート（「テーマ自己決定型レポート」）について解説していきます。

大学の講義・演習等で課されるレポートの多くは、何らかのテーマが設定されている場合がほとんどであり、自身でゼロからテーマ設定をし、レポートを書くということは少ないかもしれません。しかし、課されたレポートのテーマが広範な場合やとくに細かいテーマ指示のない自由レポートなどの場合には、テーマそのものを自分で発想（選択）する必要性が生じたり、テーマを絞り込む必要性が出てきたりすることもあり、ここでの考え方が役立つかもしれません。

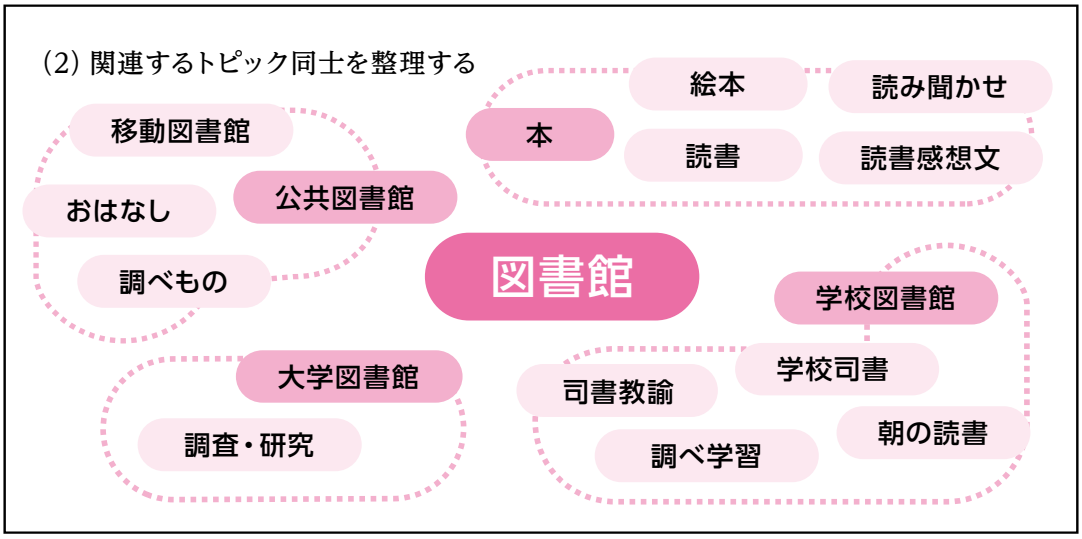
≪テーマを発想するために≫

まったくのゼロから自分でテーマを設定し、レポートを書き上げる場合には、テーマを選択・決定するための「発想力」が求められます。まずは、自身の興味・関心を明確化することから始めてみると良いでしょう。少なくとも、何らかの講義・演習において課された自由レポートであるならば、その講義・演習内で取り上げられたトピックなどをコア（核）にして、自身の興味・関心を拡げながら発想していくことが求められます。

たとえば、筆者の担当する‘司書教諭資格科目’で、とくにテーマを設定しないような自由レポートが課されたとした場合には、どのように考えたら良いでしょうか。‘司書教諭資格科目’は、図書館に関わる科目なので、コアになる部分として「図書館」を設定してみます。続いて、「図書館」というキーワードを手がかりとしながら連想するトピックなどを周囲に並べていきます。さらに、周囲に並べたトピックからさらに関連のあるトピックを結びつけていくこともできます。または、「図書館」の周囲にとりあえず連想しうる限りのトピックを挙げられるだけ挙げておき、あとから整理していくことで、テーマの方向性を探っていくこともできます。

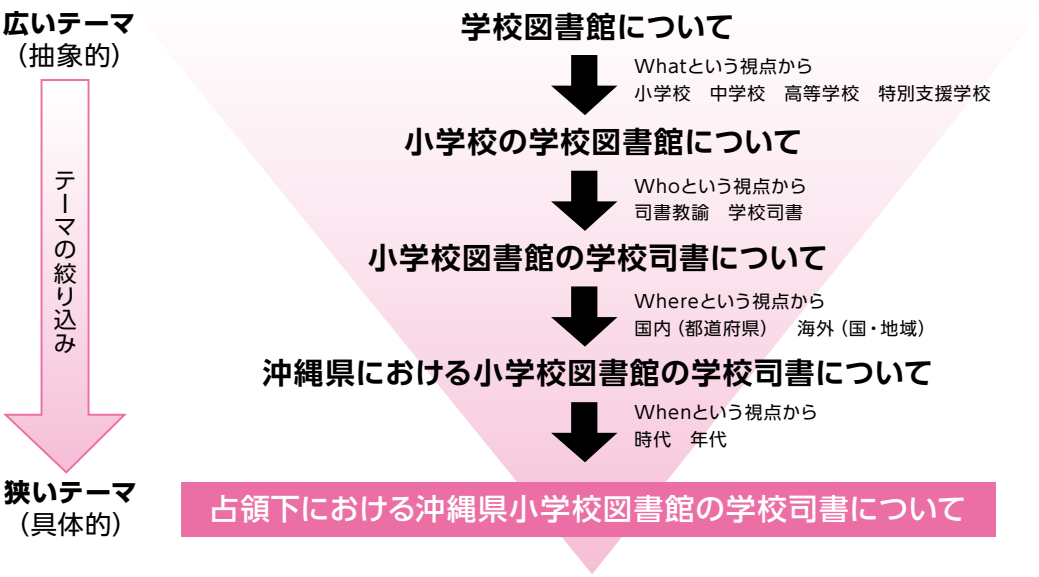
このように、連想したトピックなどについて整理する作業を行う際には、一枚の紙に直接書き出してみても良いのですが、付箋紙を用いると書き出した後の整理がしやすくなります。

また、整理をしていく中で、より自分の興味・関心のあるトピックのまとまりを見つけだしていくことができるかもしれません。たとえば、上に挙げた中では、「公共図書館」、「大学図書館」、「本」、「学校図書館」という４つのトピックに関連するものを中心にまとめあげています。そのまとまりの中で、「学校図書館」というトピックについて焦点をあててレポートを作成してみようというように、レポートの方向性を決定するきっかけを得ることができます。レポートの方向性が決まったら、さらにテーマを絞り込んでいく必要が出てきます。



≪テーマを絞り込むために≫

テーマを発想するために、さまざまなキーワードを取り上げて、自分の興味・関心に応じた大まかなテーマの方向性が見えてきたら、次は、より具体的に自分が書きたいレポートのテーマを絞り込んでいく必要があります。前項に挙げたような、「学校図書館」というテーマの方向性を考えているのであれば、「学校図書館」の〈何〉を知りたいのか（調べたいのか）という視点から大きなテーマをより小さく具体的なテーマにしていきます。5W1H〔Who（誰）、What（何）、When（いつ）、Where（どこ）、Why（どうして）、How（どのように）〕を手がかりにしながらテーマを絞り込んでみても良いでしょう。



1.2.2. テーマ既定型レポートの場合

大学で課されるレポートの多くは、すでに何らかのテーマが設定されており、そのテーマについて、何を、どのような視点からレポートすべきか、といったところまで明示されていることでしょう。そのような「テーマ既定型レポート」課題の場合については、あらかじめ絞り込まれた形で提示されているとはいえ、しっかりと求められているテーマの内容を分析・把握した上で、レポートに向き合うことが求められます。ここでのテーマの内容分析・把握の仕方いかんによって、このあとの資料・情報収集に大きな差となって顕れてきてしまいます。

それでは、「テーマ既定型レポート」課題を想定して、１つの事例に基づきながら、以下考えてみましょう。

《事例》

高度情報化社会における情報活用能力の育成のあり方について、最近の小学校での取り組みを中心にレポートとしてまとめなさい。

上に示したようなレポート課題が提示されたとします。レポートを執筆するためには、何らかの調査を行い、その結果を示す必要があります。何らかの調査を行うためには、手がかりとなる「キーワード」を提示されたレポート課題から導き出さなければなりません。ここでは、いくつかの文献を調査することを想定して、まずは「テーマ既定型レポート」を書くための土台作り（レポート執筆の材料を集めるための戦略を立てる）を行ってみることにしましょう。

手順としては、次の事項を押さえながら進めていくとよいでしょう。

①キーワードを選定する

↓

②選定したキーワードの類義語、多義語を確認する

↓

③資料・情報収集の範囲の目安をつける

↓

④分類記号を確認する

①キーワードを選定する

レポート課題に示されたキーワード（重要語）を課題本文からそのまま抜き出してみます。ここで抜き出したキーワードが、このあと行う調査において、まさに‘鍵’となります。

〈例〉高度情報化社会，情報活用能力，小学校

②選定したキーワードの類義語、多義語を確認する

①で抜き出したキーワードだけで調査（文献の検索など）に取りかかっても良いのですが、場合によっては、思うような調査結果（文献検索の結果）が得られないようなこともあります。あらかじめ、レポート執筆の手がかりとなるキーワードを複数検討しておくことが求められることもあります。①で抜き出したキーワードについて、他の‘コトバ’で表現されているような場合はないか、関連する表現はないか、調べてみることも大切です。国語辞典や各分野の用語辞典などを用いて調べてみましょう。（より専門的なツールとして、科学技術系分野については『シソーラス』があります。また、全分野について図書館では『基本件名標目表』があります。）

〈例〉高度情報化社会→高度情報通信社会，情報社会，情報化社会
情報活用能力→インフォメーション・リテラシー（Information Literacy），
情報リテラシー

③資料・情報収集の範囲の目安をつける

①・②でキーワードの設定ができたら、次に、どの程度の範囲（期間や分野）の資料・

情報を集めていくのか設定しておきます。

〈例〉期間（時代）→「最近の」という課題指示から‘過去5年間’程度設定してみる。
分野→「小学校での取り組み」という課題指示から‘小学校教育’や‘情報教育’と設定してみる。

④分類記号を確認する

③までの中で設定したキーワードや分野の範囲から、図書館で付与されている分類記号を特定しておきます。OPAC（Online Public Access Catalog：琉球大学附属図書館総合目録データベース）の［フリーワード］検索窓に選定したキーワードを入力し、検索結果の図書詳細表示からどのような分類記号の図書が検索結果として示されているのか確認してみると良いでしょう。

1.3. 資料・情報の収集

レポートを書くための土台作りができたら、いよいよ材料となる資料・情報の収集に取りかかります。最近では、多様で豊富な情報環境が生み出され提供されていることもあり、みなさんの多くがインターネットを自由に利用できる環境にあることと思います。この数十年の間のインターネットの普及は、みなさんの情報探索のスタイルを劇的に変化させたといっても過言ではないでしょう。みなさんがインターネット上のウェブサイトを検索する際に用いるサーチエンジンの代表的なものに “Google”<https://www.google.com/> と “Yahoo! Japan”<https://www.yahoo.co.jp/> があります。例えば、それら2つのサーチエンジンを用いて「琉球大学」というキーワードで検索してみると、“Google” では約23,400,000件、“Yahoo! Japan” では約34,100,000件の検索結果数が表示されていることにお気づきでしょうか（いずれも、2021年11月18日現在の検索結果数）。みなさんの多くは、それら検索結果の上位に表示された数件の検索結果を閲覧し、自身が必要とする情報か否かを判断していることと思います。このように、「琉球大学」というキーワードでの検索結果に限ってみても、これだけ多くのページが存在しているのですから、ウェブ情報資源からの目的に応じた検索方法を知り、検索結果の取捨選択をしっかりと行うことが肝要となります。ぜひ琉球大学附属図書館が提供する様々な機能をよりよく組み合わせ活用して、みなさんの求める資料・情報へアプローチできるようにしていきましょう。

ここでは、レポートを作成するにあたって、どのような材料（資料・情報源）を念頭におきながら、その収集にあたるべきか大まかな指針を示しておきたいと思います。各種資料・情報の具体的な検索方法については、第2章を参照してください。

◎レポート執筆の材料として何を考えておくべきか？

Ⅰ．レポートのテーマに関するキーワードの〈概要〉を把握する

■レファレンス・ブックにあたってみる

a. 百科事典・時事用語事典

① OPAC（Online Public Access Catalog：琉球大学附属図書館総合目録データベース）で『百科事典』や『時事用語事典』を探す。

②参考図書の開架閲覧室をブラウジング（書架を巡って立ち読み）してみる。

③先に選定したキーワードを手がかりに各事典の‘索引’を駆使して探す。

④‘参照語’についても確認する。

b. 辞書

① OPAC で関連する辞書を探す。

②参考図書の開架閲覧室をブラウジング（書架を巡って立ち読み）してみる。

③先に選定したキーワードを手がかりに見出し語をチェックする。

※冊子体のほか、2021 年 11 月現在、附属図書館ウェブサイト内の「データベース一覧」<https://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/page-471/> から「辞典・辞書」を参照すると、百科事典、人名辞典、国語・英和・和英辞典、現代用語辞典などから用語を横断検索できる『コトバンク』へのリンクが提供されています。ただし、『コトバンク』の利用規約には、「当社は、本サービス及びデータの内容の正確性、完全性、安全性、有用性について一切、保証しません。利用者自身の責任においてご利用願います。」との記載もあることから、他の事典・辞書類にもあたりながら確認することが求められます。

Ⅱ．レポートのテーマに関する〈入門書（図書）〉を探してみる

■代表的な図書にあたってみる

①先に選定したキーワードや分類記号などから OPAC で探す。

②先にあたってみたレファレンス・ブックに掲載されている文献を参照してみる。

③シラバスや授業で紹介された参考文献を探してみる。

Ⅲ．レポートのテーマに関する〈雑誌〉を探してみる

①先に選定したキーワードから OPAC で探す。

②先にあたってみたレファレンス・ブックに掲載されている文献を参照してみる。

③関連する学会の機関誌などを調べてみる。

Ⅳ．レポートのテーマに関する〈統計情報〉を探してみる

①琉大附属図書館に所蔵されている統計のガイドブックや索引にあたってみる。

・日本統計索引編集委員会，河島研究事務所編『日本統計索引』（日外アソシエーツ，1975-1976.）

・総務庁統計局編『統計情報インデックス』（総務庁統計局，1992-2006.）

・統計委員会事務局，総理府統計局編『日本統計年鑑』（日本統計協會，1949-）

②日本および主要国政府機関による統計情報を扱うウェブサイトから探してみる。

・独立行政法人統計センター「政府統計の総合窓口（e-Stat）」<https://www.e-stat.go.jp/>

・総務庁統計局編『世界の統計』（大蔵省印刷局日本統計協会，1994-1999.）最新版については、総務省統計局「世界の統計」<http://www.stat.go.jp/data/sekai/index.html> より参照可能。

※附属図書館ウェブサイト内の「データベース一覧」<https://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/page-471/> の「統計」からも統計情報サイトへリンクされています。

Ⅴ．レポートのテーマに関する〈サイト〉を探してみる

①先に探してみた図書や雑誌で紹介されているサイトを参考にする。

②先に選定したキーワードから Google などのサーチエンジンで検索してみる。

必要に応じ、Ⅰ～Ⅴにおいて掲げたような資料・情報を収集していくことで、レポートに必要となる材料を揃えていくことができるでしょう。その際、集めた資料・情報については、レポートのテーマや課題として求められている内容に照らして、〈事実〉としてどのような事柄が論じられているのか書き抜いておくと同時に、各々〈出典〉を忘れずに記録しておくことが求められます。

1.4. レポートの構成

レポート作成のための材料となる資料・情報を収集したら、いよいよレポート本文の執筆に取り組むことになります。よりよいレポートを作成するためには、集めた資料・情報に記されている事実を注意深く読み取りながら考察し、設定したテーマや求められている課題に対して、わかりやすく、説得力のある文章を書くことが求められます。思いつくままに書き出すのではなく、レポートとして求められる構成を踏まえながら論理的な文章の記述を心がけましょう。

たとえば、文章の構成や物事の順序をあらわす際に、漢詩の句の並べ方に見られるよう

な「起・承・転・結」と表現される場合がありますが、レポートの場合には、むしろ「起・承・結」という３段構成を念頭におくと良いでしょう。具体的には、「序論」、「本論」、「結論」という構成になります。

■序論…前置きとして本論の前に述べる概括的な内容。

●テーマ自己決定型レポートの場合

・扱うテーマ（問題を表すキーワード：用語）は何か？（用語定義）

・なぜそのテーマを設定したのか？（設定理由）

・そのテーマをレポートする意義とは？（必要性・重要性）

・どのようにレポートとしてまとめるのか？（テーマへのアプローチの仕方）

●テーマ既定型レポートの場合

・扱われるテーマ（問題を表すキーワード：用語）は何か？（用語定義）

・どのような視点からそのテーマをレポートするのか？（観点）

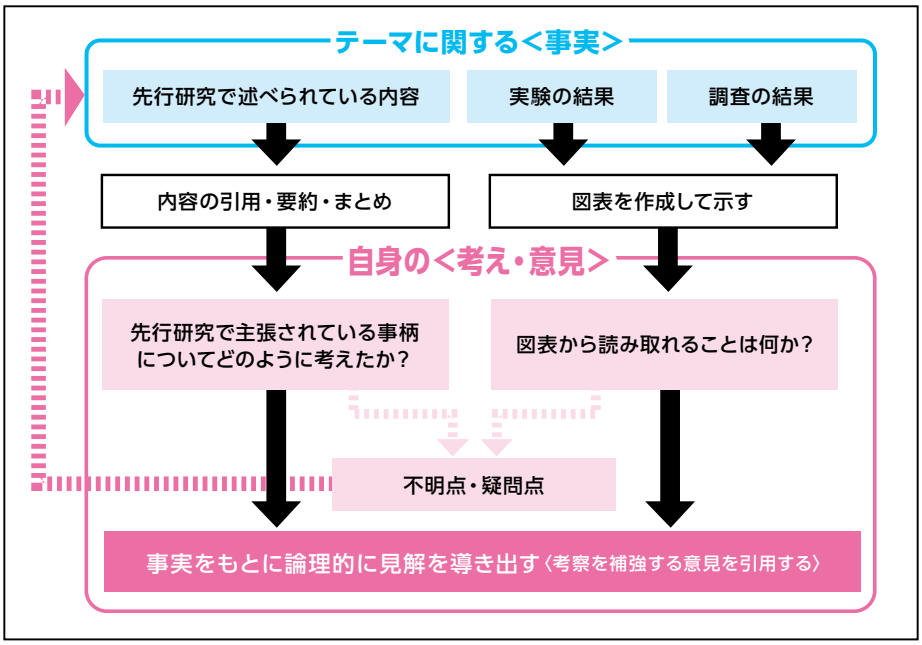
・どのようにレポートとしてまとめるのか？（テーマへのアプローチの仕方）

■本論…レポートの主となる議論。根幹をなす論述。

■結論… 本論における議論や考察の結果まとまった考え。または、一つないし複数の前提から導き出された命題。帰結。

・本論の議論からどのようなことが言えるのか？（主張・見解）

・さらに検討すべき課題・問題点はあるか？（今後の課題）



これまで見てきたように、レポートを書くためには多くの資料・情報を収集し、その資料・情報を根拠としながら、結果を示すことや、あなたなりの考えを示すことが求められてきます。WWW上で提供されているフリー百科事典「ウィキペディア」は、手がかりを得るのに役立つ反面、評価の定まっていない情報が掲載されていることもあります。たとえば、「ウィキペディア日本語版」には次のような免責事項が掲載されていることをご存知ですか？

> 本サイトが提供している情報に関しては、合法性、正確性、安全性等、いかなる保証もされません。本サイトの参加者、管理者、システム管理者、そしてウィキメディア財団は、これらの情報をあなたが利用することによって生ずるいかなる損害に対しても一切責任を負いません。
> 〔「ウィキペディア日本語版」<https://ja.wikipedia.org/> のページ下部「免責事項」よりアクセスのうえ参照可能。（2021 年 11 月 18 日現在参照可能）〕

上記の文言からは、レポート執筆にあたってウィキペディアからの引用は行うべきではないことを示しています。レポートに示した結果や考えを裏付ける根拠を明確にするためにも、ぜひ附属図書館を有効に活用して、よりよいレポート作成をめざしてください（第２章参照）。また、レポートを執筆する際には、資料・情報の適切な引用や参照を示すことが求められます。引用や参照など出典の明示方法についての解説は、第３章を確認してください。

参考となる文献紹介

梅棹忠夫『知的生産の技術』岩波書店，1969，（岩波新書；青 -722）.
立花隆『「知」のソフトウェア：情報のインプット＆アウトプット』講談社，1984，（講談社現代新書；722）.
斉藤孝, 西岡達裕『学術論文の技法　新訂版』日本エディタースクール出版部，2005.
大串夏身『文科系学生の情報術』青弓社 ,2004.
竹田茂生 , 藤木清編『知のワークブック : 大学生と新社会人のための』くろしお出版 ,2006.
大島弥生ほか『ピアで学ぶ大学生の日本語表現 : プロセス重視のレポート作成』（第 2 版）ひつじ書房 ,2014.
渡邊淳子『大学生のための論文・レポートの論理的な書き方』研究社，2015.